

第5章 遺跡保存と立合調査

1 植物園遺跡B D35地区縄文配石遺構の移築

移築の具体的な作業としては、1)遺構取上げ作業、2)受入準備作業、3)移築作業、があった。

遺構取上げ作業 配石遺構の取上げは次の行程をふんだ。1)配石のまわりに杭を打ち、10分の1の図面に配石と杭を記入する、2)配石まわりに杭を含み、底のレベルがそろう溝を掘る、3)溝に石膏を流し込み配石の側面の型を取る、4)樹脂で配石の各石を接着する、5)石の上に銀紙を貼りつけ、樹脂で配石の上型をとる、6)石にマジックインクでナンバーをうつ、7)取上げ状況の写真を撮る。以上の作業は初めての試みであったため多くの失敗を犯した。石膏下型は補強の不充分さと風化でボロボロになり、樹脂による石のブロック化は石膏下型との接合を阻害した。上型は役に立たず、マジックインクのナンバーは石にしみこみ、移築後消し取ることができなくなった。また取り上げ写真は撮影位置と角度を記録していなかったため正確さを欠いた。以上のごとく各行程の実施において技術的な問題が数多くあった。

受入準備作業 移築の場所は遺跡に隣接する植物園内の一角が提供された。移築に際して立木を切らないですむように立木の位置を測量し、立木の位置図と配石および甕棺の平面図とを重ねあわせ遺構の設置場所を決定した。移築現場に調査中用いた遺構の実測基準線を復元し、配石移築の時、各石のエレベーションを調整するためのレベル杭を設置した。甕棺の移築は複製品を用いるため専門業者に複製を依頼した。

移築作業 配石の移築は次の要領で行なった(図版)。1)各配石の設置場所に配石が入る程度の長方形の穴(深さ約30cm)を掘り、穴の底および側面に後に注入する樹脂が漏れないように樹脂を塗布して固める、2)少量の砂で樹脂を注入するためのパイプを埋めてから、砂をいっぱいに入れる、3)各石を遺構平面図に従って復元設置する。基準線からの距離と高さを確めながら、取り上げ時の写真を参考にし1個1個の石を組み上げる、4)あらかじめ砂の中に埋めておいたパイプに樹脂を注入する、5)樹脂が砂表面に吹き出すようになった段階で注入をやめ地表面より樹脂を散布する。この時同時にふるいにかけて細かい土をかけ砂の表面を化粧する。この化粧の上から更に樹脂を散布して土を固定する。樹脂が硬化することによって配石は地面に固定される、6)石の上に重なる石は別の樹脂を用

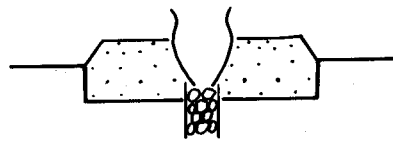
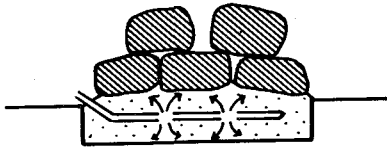


図27 移築模式図

入れ甕棺が目立つように地表面から砂を約10cm盛りあげ、その上に甕の上部を10cm露出させた、4)砂の上から樹肥を散布する。樹脂の膨張が甕を破損しないように促進剤は混入しない、5)ふるいにかけて土を散布し更にその上に樹脂をまいて固定する、6)甕の中に底から約10cmの高さまで砂を入れる。雑草が生えるのを防ぐため、この中には土を入れない、7)配石に伴う甕棺については窪地に埋める場合が多いため甕の周囲から水が抜けるように工夫する。甕を覆う石は取りはずせるようにする。

配石および甕棺移築の方法は以上の通りである。樹脂は砂および化粧土を固めるためのタックス、石と石を固定するためのエポキシ、風化止めのMD7の三種類を用いた。

その他の作業 配石および甕棺についての説明を記載した京都大学理学部植物園内縄文時代遺跡の標示板を植物園内の歩道に沿って設置した。また今年度中にこの標示板の横に入口を設けて移築現場全体を簡単なフェンスで囲う予定である。(吉野)

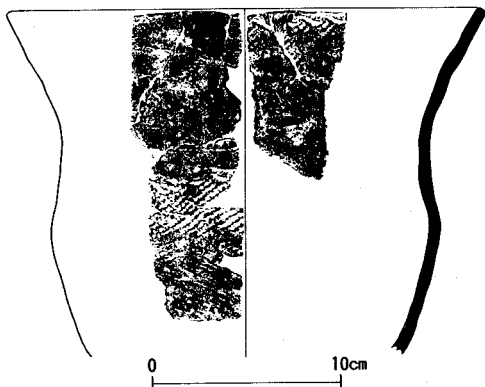
2 教養部遺跡A L24地区立合調査

教養部構内の変電設備を改修する工事が予定されたため、工事予定地に沿って6ヶ所の試掘調査を行なった。その結果吉田寮の付近で良好な遺物包含層と溝状の遺構を検出したので工事の際に立合調査を実施した。またE号館北西部付近や吉田寮付近では遺構を検出したので工事を一時中止して調査を行なった。調査地域の層位は全域にわたってほぼ均一

であり4層に大別できる。第1層は表土、第2層は灰褐色の耕土・床土である。第三層は地表下0.5m～1mにある茶褐色もしくは淡で地表下0.5～1.0m厚さは平均して20cm前後である。鎌倉時代の瓦、土師器の皿・高坏、瓦器の埴・羽釜が出土した。第4層は厚さ0.2～0.3mの黒色もしくは暗褐色の砂質土で調査区域西端にはない。平安時代末頃の土師器の皿・甕・高坏、青磁が出土した。弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式）の土器片が混っている。第4層の下は黄砂層である。吉田寮の南でこの砂層上面もしくは砂層中より弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式）の土器が出土した。調査期間がなく工事は砂層を大きく掘りこむことがないためこの層の発掘は断念した。この調査で検出した遺構はE号館付近の瓦溜め、吉田寮入口付近の溝Ⅰ、吉田寮南側の溝Ⅱ、溝Ⅱの西ピット溝Ⅲなど茶褐色土の落込みである。瓦溜めはマンホール構築の際に一部を破壊されていたため平面的な広がりとは確認できなかった。断面から砂層の凹地に堆積する第4層の上から掘りこむ、第3層堆積直前の整地にとまなうものかと考えられる。大量の割石に混じり剣巴文軒平瓦、平瓦、土師器の皿・高坏、瓦器の埴、青磁、常滑焼甕等が出土した。時期は平安時代末から鎌倉時代である。溝Ⅰは砂層上面から掘りこみ幅約1mで土師器の皿が大量に茶褐色土から出土した。時期は第3層とほぼ同じで鎌倉時代である。溝Ⅱは南北方向に走る大溝である。幅60cm、深さ80cm、幅1.5m、深さ50cmの2本の溝が平行している。瓦、土師器皿などが出土し時期は平安時代末から鎌倉時代である。ピットは径1m、深さ50cmで瓦、土師器の皿・高坏、瓦器の羽釜、陶器が出土した。時期は第3層と同じく鎌倉時代と考える。溝Ⅲはやはり砂層上面より掘りこんだV字溝で、幅1.5m、深さ1.2mである。鎌倉時代の土師器の皿・高坏、甕、瓦器の羽釜、鍋、青磁、弥生時代前期の土器が出土した。この溝の壁面で黒色土や黄褐色粘土の層を認めた。茶褐色土の落込みはV字溝のすぐ西隣接し、確認しただけでも径5mの性格不明の大きな落込みである。剣巴文軒平瓦、土師器の皿・高坏、瓦器埴、陶器、青磁皿が出土した。時期はV字溝とほぼ同時期と考える。以上のほかに調査区域の西端、楽友会館北のマンホールから室町時代のものと推定できる宝篋印塔が出土した。（吉野）

3 教養部A S 23遺跡試掘調査

教養部構内に車庫の建設が予定されたため昭和52年1月23・22日に試掘調査を行った。東西2ヶ所のテストピットを設定し、いずれも約2m掘り下げ、地山の白砂層に達して発掘を終了した。層位は黄砂層により上下2層に区別され、上層から須恵器、土師器、瓦が出土した。テストピット南半では幅約2m、深さ約1mの溝を検出した。溝は黄砂層から



第28図 縄文土器

出土した。地山白砂層上面の標高はテストピット東端で54.4m、西端で53.8mであり地表からの深さはテストピット東端で1.2mである。(吉野)

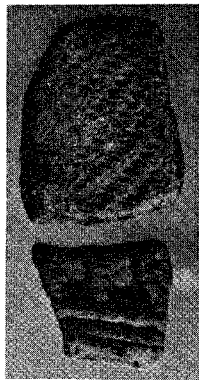
掘りこみ、ほぼ東西方向に走る。平瓶の破片が出土し、奈良時代の溝である可能性がある。下層には黒色の縄文時代層が存在する。この層は地山の白砂層の傾斜に沿って東から西へ下がりつつ厚くなり、更に西では薄くなる。最も浅いところで地表下0.8m、深いところで1.6m、厚さは最も厚いところで1.0m、薄いところで0.2mである。縄文時代後期彦崎KⅡ式の広口の深鉢が出土

4 農学部遺跡B J 33の試掘調査

北部構内に農学部ガラス温室の建設が予定されたため、昭和52年1月23・24日に試掘調査を行なった。

調査は予定地東西方向の中心線にそった2×2mのテストピットを9m間隔に2ヶ所設定し発掘を行なった。東側がTP1西側TP2である。

層位は黄砂層をはさみ大きく上下2層に区別された。TP1の上層は上から淡褐色土層、灰黒色耕土層があり、遺物は出土しなかった。下層は北面では黒褐色砂質土層3層に細分されるが南面で区別できない。黒褐色土層の上部から、加工した半截竹管で施文した縄文時代前期末の土器と中期末の土器、植物遺体が出土した。黒褐色土層の下は地山の白砂層である。



第29図

TP2の上層には上から灰黒色耕土層、灰白色砂層、灰褐色土層がある。灰白色砂層、灰褐色土層、黄砂層を掘りこむ近代の溝があり、鉄片と土師器細片が出土した。下層には黒褐色土層があり、植物遺体が出土した。黒褐色土層の下は地山の白砂層である。

縄文土器を出土した黒褐色土層は東側が西側より厚く、北から南にかけて高くなる。

本調査の結果この地点に縄文時代前期末～中期にかけての土器を包含する層のあることが確かめられた。(宇野)